

◆古都・奈良は今、平城遷都1300年祭のまっただ中だ。県内各地で多彩な記念イベントが催され、悠久の都の歴史や文化を内外に発信している。中核となる平城宮跡周辺のにぎわいは万葉歌「あおによし 奈良の都は 咲く花の にほふがごとく、今盛りなり」(小野老)といった趣だ。

時流 地流

◆その奈良がもう一つ、全国へ「復権」ののろしをあげているものがある。吉野地域の割りばしだ。国内の割りばし消費量は年間約230億膳で、ほとんどが中国からの安い輸入品だ。20年前に100億膳を超えていた国産品は輸入品に押され今や、5億膳程度。日本の大量消費が二酸化炭素(CO₂)吸収源の「熱帯雨林」を破壊しているとの一部環境団体の非難が追い打ちをかけ、輸入割りばしの排斥運動に巻き込まれたことも響いた。

割りばしが訴える森林保護

2008年秋、地域の森林と地球環境を守る「Yoshino Heartプロジェクト」を立ち上げた。その柱が袋に広告が入ったヒノキの割りばしを大手コンビニに割安に販売する「アドバシ」プロジェクトだ。輸入品との価格差を社会的貢献を目指す企業からの広告収入で補てんする戦略だ。ナチュラルローソンの首都圏約80店舗でこの春から配られている南都銀行の「平城遷都1300年祭」のアドバシもその一つだ。

◆国内の割りばしの原料は間伐材や、建築端材だ。森林破壊どころか、森林資源の循環や、森林が吸収したCO₂を伐採後も木の中に固定し、排出を抑える役割を担っている。だが、その森林そのものが国産材の価格低迷で手入れされず、荒廃が進んでいる。森林整備のコストを捻出(ねんしゅつ)する上でも、間伐材の利用拡大は急務だ。

◆森林、環境保全のコストをだれが払うのか。吉野の取り組みは緒に就いたばかりだし、割りばしの量的貢献はわずかなものだが、都会の消費者が林業の抱える問題に向き合っきっかけになることを期待したい。

(戸所寛美)